

## 亀嶋庸一先生の御退職に寄せて

前法学部長 遠藤 誠治

亀嶋庸一先生は、一九八一年四月に非常勤講師として成蹊大学法学部の教壇に立たれ、その五年後の一九八六年四月に助教として成蹊大学法学部に着任されました。さらに、三年後の一九八九年四月に教授に昇任され、本年三月末に教授職を退職されるまで、三二年（非常勤講師としての五年間を加えると三七七）におよぶ長い期間にわたって、法学部および成蹊大学全体における研究・教育に大きく貢献されました。また、二〇一六年四月には成蹊学園学園長に就任され、現在も引き続き成蹊大学を含む成蹊学園の発展に貢献を続けておられます。

この間、成蹊大学・成蹊学園においてほぼ全ての重要な役職を担われたといっても過言ではありません。その詳細は年譜をご覧いただくとして、主だったものだけを記すならば、法学部政治学科主任・法学政治学研究科政治学専攻

主任、大学評議員を務められた上で、二〇〇四年から二〇〇八年まで法学部長・法学政治学研究科長をお務めになり、引き続き二〇〇八年から二年間、アジア太平洋研究センター所長をお務めになりました。そして、二〇一〇年四月から二〇一六年三月までは、社会的にも成蹊学園の中からも大学改革を求める声が高まる難しい状況の中で、成蹊大学長の重責を担われました。

特筆すべきことの一つは、亀嶋先生が、成蹊大学法学部および成蹊大学大学院法学政治学研究科の卒業生でもいらっしやるということです。亀嶋先生は、創生期の成蹊大学法学部において、政治学科・法学政治学研究科で活躍された諸先生方から教えを受けられたのみならず、経済学部にも所属しておられた安藤英治先生にもマックス・ウェーバー研究に関する教えを請われました。その意味で、亀嶋先生は、今年創立五〇周年を迎える成蹊大学法学部の半世紀を体現してこられた、ミスター成蹊ないしはミスター成蹊大学法学部とお呼びしてもよい存在だと、私は考えております。

亀嶋先生の学問的営為を一言で要約するようなことはできませんが、私なりに受け止めさせていただいている限りでは、亀嶋先生の問題意識と関心の持ち方は驚くほど一貫していません。それは亀嶋先生が、修士論文でマックス・ウェーバーを取り上げられ、本号に収録されている最終講義でも同じくウェーバーを取り上げられていることに象徴されています。しかし、それは研究対象としてのウェーバーへの関心が持続しているということにとどまりません。むしろ、私なりに考えるところでは、一貫しているのは、政治の暴力性という問題に正面から取り組んだ政治理論家たちの現実政治との格闘から、現代を生きる私たちへ遺された知的遺産を正確に読みとろうとする姿勢だと思えます。

より具体的には、亀嶋先生は、一九世紀から二〇世紀への転換期にあつて、官僚制、大衆社会化、ナシヨナリズム

ムの台頭という大規模な変化の中で、そうした変化がもたらす巨大な拘束ないしは桎梏への対応を追求したベルンシュタイン、マックス・ウェーバーをはじめとするドイツの政治理論家たちの思想的・理論的営為に関する探求から知的歩みを始められました。その後、取り上げられる対象は、思想家としてはカール・シュミット、ハンナ・アレントなどを、地理的な範囲としてはドイツや西欧を中心とするものから非西欧世界をも含むものへと拡大していかれました。しかし、それを拡大と呼ぶことは恐らく間違いで、亀嶋先生は、社会を統合し導く力を欠く政党、脆弱な議会制民主主義、分極化する社会などという問題が山積みになる中で、自由を護りながら政治の暴力性はどう向き合うのかという問題と正面から向き合った政治理論家たちに関心を向けてこられたのだと思います。つまり、亀嶋先生ご自身が、ナショナリズム、戦争、革命、全体主義、ファシズムという政治の暴力性が最も強烈に現れた時代における政治のあり方に関心をもち続けてこられたのだと思います。

その際に、流動的な状況の中で政治理論家たちがどのように判断したのかということに学問的関心を傾けられるという点が、亀嶋先生の特徴だと思います。つまり、政治と政治社会が抱える普遍的な問題への普遍的解答のあり方に関心を向けられるのではなく、理論家のその時々々の状況判断とその根拠を当時の歴史的文脈の中で明らかにしつつ、時代の刻印の残された解答がもつ意味を正確に明らかにしようとしてこられたのだと思います。そういう歴史的文脈に敏感な探求をされてきたからこそ、亀嶋先生の知的営みには、学問的常識や常套句、レッテルに対する違和感とチャレンジが常にあり、それが豊かな成果を生んできたのではないかと考えます。

そうした知的構えの反映でもあると思いますが、大学の中で日本政治の現実について、あるいは大学を取り巻く社会状況についてお話をするときの亀嶋先生の状況分析は、自由と自己決定の価値という原則を守りながらも、過剰な

決めつけや一般化を排しています。常に流動的な状況の中で起こりうることを考え、柔軟かつ想像力ある対応を考え続けてこられたゆえのことだろうと思います。

このように描くとマックス・ウェーバーのような人柄を想像させるかもしれませんが、実際の亀嶋先生のお人柄は、学者にありがちなエキセントリックなところが欠片もなく、実に穏やかおおらかで、周りの人々への細やかな配慮を欠かされたことがありません。それも亀嶋先生の大きな魅力だと私は考えています。

亀嶋先生は、本年三月をもって大学教員としてはご退職になりましたが、引き続き学園長としてのお仕事を続けていかれます。私たち法学部教員を含む成蹊大学の知的コミュニティが自由に学問をする場であり続けられるよう大学長・学園長の職務に取り組んでこられました。ご本人の中に、研究者としての鮮烈な問題意識と探求課題を保っておられることは、最終講義が明確に示したところです。恐らく、ご自身が最もエネルギーを傾注されたいと思っておられる研究に戻ってこられるまで、まだ、少し時間がかかってしまうかもしれません。しかし、依然として政治における暴力の問題は解決せず、ナショナリズムが力をふるい、独裁政治やファシズムが勢いをえており、民主政治の基礎が揺らいでいる現状にあつて、亀嶋先生の政治的知見が必要とされる時代はまだまだ続いています。

先生がご健康に配慮されて、学園長としますますご活躍されることをお祈り申し上げるとともに、研究者としてのご活躍をお待ちしたいと思います。